
怖い話…

あんじえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怖い話…

【Nコード】

N1491C

【作者名】

あんじえ

【あらすじ】

私が経験した怖い体験をお話します。眠れない夜に、どうぞ…。

(全7話＋最終話)

第一話 病院の怪（前書き）

昔、つらつらと綴った恐怖話。ご披露するのも恥ずかしいですが、あまり深く考えずに投稿してみます。まずはもうとつくの昔に亡くなった祖母の話からです。霊感の強い人でした…。

第一話 病院の怪

私の祖母は、若いころ、体が弱く病気がちだったらしい。

ある時、とうとう入院することになって、その最初の夜のことである。

部屋には病院独特の陰気な臭いが染み付いていて、慣れないベッドの上で何度も寝返りを打ちながら、ようやくとうとうとしかけた……その時。

ふと目を開けると、ベッドの傍らに人の気配がする。

闇に目を凝らしてみると、そこには白い着物を着て、頭に三角形の布をつけた男の人が立っていた。

彼は手をだらりと下に下ろし、膝から下は――

なかった……。

「ぎゃーっ――!!」

祖母は叫んで、ベッドから転び出た。

「ゆ、幽霊！」

祖母はきしむドアを必死で開けて廊下に出た。すると……。

なんと、その暗い廊下に、ずら〜つと幽霊が立っているではないか！

たくさんさんの病室のドアというドアの前に、ひとりずつ、何人も……。

祖母は悲鳴を上げた。

悲鳴を上げながら階段を駆け下りた。

真っ暗な庭に出たとき、ようやくそこには霊たちがいないのを知って、祖母は気を失ったという。

「だから、絶対に、病院だけは嫌や。二度と入院はしないんや。

┐

幸い祖母は、それ以降、ずっとお医者さんのお世話になりながらも二度と入院することはなく、自宅で息を引き取った。

私は今でも病院にふれるたび、祖母のこの言葉を思い出す。

第二話 三途の川

「三途の川なんかあるのかな？」

軽い気持ちで聞いた私に、祖母はひと呼吸間を置いた後、じっと私の目を見つめて言いました。

「ある。」

その真剣なまなざしに、私はちよつと驚いたのです。

「三途の川は、ほんまにあるんやで。」

三途の川は、ものすごくきれいな川や。

流れは穏やかで、水面は鏡のように光っているんや。

そしてその川の上に一本の橋が架かっている。

おばあちゃんは、その橋を渡ったんだよ。」

祖母は一度死んだと言いました。

重い心臓の病気で、一度心停止した、と。

祖母は三途の川の橋を渡りました。

川向こうには何人かの人が祖母を迎えてくれて、祖母はその人たちについていったそうです。

しばらく行くと、突然祖母の体はぐんと下に落ち、そのままどんどんどんどん落ちていきました。

ざあーっという感覚で落ち続けたのです。

するとその先に、ひとりのおじいさんが手を出して祖母を待っているではありませんか。

祖母は手を伸ばし、おじいさんの手をしっかり握ると、力いっぱい引き上げたのです。

「その人は、地獄に落ちとったんや。」

その瞬間、私はなぜか、ぞおっつとしました。

「偉い人なんやけど、地獄に落ちとったんや。おばあちゃんはその人を助けてきたんやで。」

それから、祖母とそのおじいさんは、また何人かの人に案内されて、きれいな御殿に着いたそうです。

長い渡り廊下をいくと、広い広い大広間があつて、そこに祖母とおじいさんにはお膳が用意されていました。

二人が座ると、どこからともなく手が現れて、二人の前のお膳にお料理を置いていきました。

その腕はひじから下だけで、パツパツと現れてはサツと消えてしまふのだそうです。

そうしておじいさんは、実に満足げに舌鼓を打ちながらそのお料理を食べていたのだそうです。

それから後の話を、私は忘れてしまいましたが、たしか娘である私の母の声が祖母を呼び戻した、というように聞いたと思います。

そのおじいさんが誰なのかも、祖母はわかつていたようですが、教えてはくれませんでした。

私は、三途の川はあると言ったときの、祖母の真剣なまなざしを忘れることができません。

祖母は天国があるとは言いませんでした。

でも、「地獄と三途の川はたしかにあるのだよ」と、それだけは念を押すように私に言いました。

本当に靈感が強かった祖母の言うことは、私はすべて信じています。

第三話 劇場の怪

だいたい古い劇場というのは、出て当然のように、怖い話の一つや二つはあるものである。

出世できなかった役者の浮かばれない霊だとか、その土地の因縁による自縛霊だとか。

このK市の劇場は、大都市の真ん中にある。そして歴史がある……つまり、古い。

これは、この劇場でお芝居の公演をうつことになった時の話である。

そのホールは、階段から楽屋まで、何となく重い空気を漂わせている。

楽屋は大・中・小と三つあって、大・中の部屋は大丈夫だが、なぜか小部屋がいけない。

小さいせいか、妙な圧迫感がある。

ホールの人によると、そこは「大物部屋」というのだそうで、かの杉村春子氏や栗原小巻氏も使った部屋だそうだ。

もしかしたら、他の役者さんの羨望やねたみがたまりやすい部屋なのかもしれない。

しかし、このホールで一番怖いのは、劇場そのものなのだ。
舞台裏の上手奥には、湿った陰気な空気が立ち込めている。
そこを通り過ぎるだけでも相当に気持ち悪い。

白い着物を着た人が立っていても不思議ではない空間。

しかし、ここで幽霊を見た人がいるわけではない。

団員の一人は、二階客席にいて、”それ”を見たのだという。

二階の客席には、たしかによんだ空気が漂っている。気持ちが悪
い。

二階には、客席をはさんで、調光室とミキサー室がそれぞれ独立
して上手と下手にあり、ミキサー室側で作業をしていた彼女が、そ
の調光室側の客席にふと目をやった、その時……

がしゃっ……。がしゃっ……。

真っ黒な鎧を身に着けた武者がこちらへ歩いてきた。

がしゃっ……。がしゃっ……。

武者は、カーブになった客席の通路を歩いてくる。

がしゃっ……。がしゃっ……。

彼女は声が出せなかったという。

実はこの土地では昔、ある有名な合戦が行われている。

この武者はそのとき無念の死を遂げたのであろう。

この悲惨な合戦で散った多くの魂が、おそらくこの劇場全体を包んでいるのである。

合掌。

第四話 真夜中の鎖

私は昔、劇団に入っていたことがある。

それまで団体行動が苦手だった私に、仲間の楽しさを教えてくれた。

週一回の活動ぐらいではそんなに仲良くはなれなかったかもしれないが、私たちは週末に泊り込みで寝起きを共にしたせいで、文字通りの「裸の付き合い」ができていたのである。

その合宿所というか、寝泊りをする家が無償で提供してくれた奇特な人がいらっしやった。

電気・ガス・水道・電話など、公共料金の一切も払ってくれて家賃はタダ。

ただこのサークルのファンだというだけで、本当に奇特なかつた。

かなり昔の造りで、時代は明治か大正時代だろうと思われる。が、「当時としてはハイカラで、なかなかのお金持ちの家」っぽかった。格子戸があつて、池と石灯籠のある庭付きの和風の家だが、玄関を入った右手の部屋は板張りで洋風の窓があり、なんと暖炉まであった。

照明器具は、当然シャンデリアである。

大きな家で、部屋が5つはあったろう。

ただ、その家はかなり怪しかった。

……というのは、この家は信じられないぐらい荒れていて、ちゃんと使える部屋は二階の八畳の和室一室だけだったからだ。

私たちはその部屋で寝泊りしていた。

二階の、階段をはさんで向いの六畳の和室には、おそらくノラ猫が出産したのであろう血のこびりついた布団が何枚も積み重ねてあって夏には大量のノミやダニが発生した。

一階にいたっては、化け物屋敷である。

その玄関横の洋間だけは稽古に使えるには使えたが、年中ほりとゴキブリの死体が絶えたことはなかった。

奥の和室は電気がなくて昼間でも薄暗い。ただ電話機だけがぽつんと置かれている。

そしてその押入れには、大変気色悪いことに、何か神様を祭っていたようなあとと、ぼさぼさの髪の毛の20センチほどの日本人形が置かれてあった。

さらにさらに、廊下は奥へと続いていて部屋が二つくらいはあるのだろうそこは、無残としかいえないようがない。

そこにもかつて猫が死んでいたという布団が重ねられ、泥棒が入ったか乱闘があったか、本棚は倒れ、ふすまは破れ、布団やなにやらがぐちゃぐちゃに散乱した部屋がある。

かろうじて台所と風呂場、洗面所、トイレは使っていたが、今に思えば、なぜにだれも掃除しようと思わなかったのだろう。

（それほどひどかったのである。そして入るのが恐ろしかったのである。）

そんなわけで、この家ではさまざまな不思議現象が起こった。

格子戸を開ける音がして、誰か来たな、と思っても誰も来てはいなかったり、みんなが夜寝ていると階段を上ってくる足音がしたり、

怖いテレビを見ていると部屋中でバシバシ！とラップ音がしたり。

それから、夜中にお風呂に入っていると、しゃららん……と鎖を引きずるような音が聞こえるそうである。

この音に関しては、私は聞いたことがないが、何やら昔、この主が一匹の犬を飼っていたそうで犬小屋がちょうどお風呂場の窓の真下にあったそうだ。

一度本当に驚いたのは、来るべき人数がそろって皆二階にいるとき、一階で突如として「だだだだだだっ！！」という物音と、次に何か重いものを引きずるような「ずずずずーっ」という音がしたことがあった。

ものすごく大きな音だったので誰か入ってきたのかと、皆慌てて階下へ降りていった。

「誰だ！出て来い！」

みんなしてどなった。

しかし、そこには何の形跡もなかった。

まして、人などどこにもいない。玄関が開いた様子もない。

「猫か？」

しかし猫ならあんなに大きな物音はたてまい。

結局わからなかった。

今考えると、そのときはあまり恐怖心がなかったように思う。

今、こうやって回想しているほうが、何やら背筋がぞおっとする。

第五話 のぞく女

第四話でお話した家で経験した怖い話の続きである。

そんなわけで、この家にお化けが出て不思議ではないくらい、この家は荒れていた。

いちおう使っていた台所でさえ、ある日死臭がするので置いてある大きなポリバケツの中をのぞくと、ねずみが腐って半分ドロっていたり。

しかし若さゆえか、私たちが食欲を失うことはまったくなかった。

だいたい家全体が（八畳間を除いて）死臭に包まれていたような気がする。

猫が死んでいたという、その名残であろうか？

また、例の押入れに置かれた日本人形だが、これがたしかに後ろを向けておいたのにふと見ると前を向いているのである。

最初は気のせいかと思ったが、試したのはどうやら私ひとりではないらしく、「やっぱリーイ?!」ということになった。

さらに、唯一住める八畳間も安全ではない。

この部屋の壁にはお坊さんの姿が浮き出ている。

リーダーは、「このお坊さんはここを守っている人だから心配はない」と言った。

だがある日……。

ついにこの部屋にもねずみが出るようになったので、何とかしようという話になった。

ねずみはどうやら、押入れの上の開いている天井からやってくるらしい。

六畳のほうの押入れの天井も抜けていたので、そちらも板をあてがってふさぐことにした。

はたしてそれは、身長のある私の役目となった。

六畳間のほうは難なく終わらすことができた。案外簡単だった。

ところが……。

八畳間の押入れの天井をのぞいたとき、私は実に嫌な感じを受けた。

空気が違う。

重くて暗い。

上に何か……の存在を感じる……。

ただの気のせいだと自分に言い聞かせて、私は押入れに入った。

膝をついて板を上にあてがおうと顔を近づけた。

とたんに、なぜだかものすごい怖さが背中をぞっと走った。

私はそれ以上、その姿勢を続けることができなかった。

「うわあゝゝっ!!」

私は声をあげた。

私だけじゃなかった、下にいる皆も怯えている。皆も何か、
を感じているのだ。

一人の子がずっと逃げていった。

でも私は逃げるわけにはいかない。両手で重い板を支えているの
だ。

はやくこれをふさいでしまわねば。

”嫌だゝっ、怖いゝっ、うわあゝっ。”

なんとか叫びながらも、私は役目を終えた。

しかし何だったのだろうか？ あの時さは。

天井は、ふさぐともう、どうということもなかった。あの重苦し
い空気は消えていた。

「ちょっとー、何よ。さっきはさっさと逃げちゃってさ。」

私はその子にグチった。

すると彼女は気づかなくてよかったのよ、というような目をして言った。

「さっき天井に顔近づけたときね、言ったらあかんと思って向こうに行ってんけど……、

——上から女の人さがささまにのぞいたのよ」

第六話 黒猫

春、生み捨てられた子猫たちが増える季節。

その子猫たちは駅の線路沿いの木の植え込みに住み着いていた。

茶色のトラ縞と真っ黒な子猫。

二匹はとても仲良しで、じゃれあう仕草は愛らしく、ノラ猫ではあったが、駅を通る人たちがえさをやったりなでたり、結構かわいがられていた。

ほっこりとした小さな丘のようになった草の上で、小さな黒いかたまりみたく寝そべっている後ろ姿は、思わず見入ってしまうくらいかわいかった。

こんな春の日が永遠に続けばいいのに、と思った。

秋になって、二匹はずいぶん大きくなった。

好奇心旺盛で、徐々に行動範囲が広まっている。

ここは駅前で、車の交通量が多い。

おまけに線路の側だから、電車にも注意しなくてはならない。

たぶん、そんな子猫たちをはらはらして大勢の人が見守っていた

ろう。

だがとうとう悲劇は起きた。

線路の前で、黒い猫のほうが車に轢かれて死んでいた。

正視できなかったが、腹を轢かれていたと思う。

見開かれた目、口。

道路に飛び散った真っ赤な血と、黒い黒い塊。

後に残った茶トラの猫は、オスだったが、とても細いかわいい声で「みゃー」と鳴く子で、黒い子よりも人になついていた。

それだけさみしがりだったに違いない。

黒い子がいなくなって、とてもさみしそうだった。

最初のうちは、なんとなく探しているようにも見えた。

だがその子は永久に独りぼっちになってしまった。

それは冬のある夜だった。

いつものように駅を出て、ふと、いつもその猫のいる木のあたり

を見た。

すると、茶トラの子の傍に黒猫がいるではないか。

ぼさぼさで、目だけが鋭く光っている。

私は何度も見直した。

まさか、あの子じゃあるまい、きっと他の黒猫…。

だが、その黒猫の恐ろしげな様子は、死んだ子が蘇ったのでは？
と思わせるほど異様だった。

それは、横に静かに丸まっている茶トラの猫とは明らかに違っていた。

冬の強い風が吹いて、黒猫の毛をますます逆立てる。

猫は「しゃーっ」と尖った牙を見せた。

それでも私はうれしかった。

茶トラの猫は、今だけは独りぼっちじゃない。

たとえ黒猫の幽霊でもうれしに違いない。

「よかったね。」

私は小声で言って通り過ぎた。

それから次の春までは、茶トラの猫は独りだった。

それ以降、一度も付近で黒猫を見たことはない。

だがその茶トラの猫も死んでしまった。

電車に轢かれてバラバラになった。

私が通りかかったのはもう夜中だったので、それが茶トラの猫であると断言はできないが、私の目に映ったのは肉球をこちらに見せた猫の手が一本、線路の上に転がっている様だった。

それ以来、茶トラの猫も見ない。

二匹はまた、寄り添って転がっているだろうか。

あのいつかの春の日のように。

第七話 すれ違う女

その日は残業になった。

幸い家が近い人がいて、車で送ってもらえることになり、私はその人の車に他の女の子二人と一緒に乗り込んだ。

もう夜中を回っていた。

彼女たち二人の家は近所で、山の手にある。

さすがに若い二人は夜中過ぎても元気で、よくしゃべる。車中はかなり賑やかだった。

車は、しばらくはそうして広い国道を走っていたが、やがて上方へ行くルートを辿り始めた。

街灯も少なくなつて、だんだんと道が暗くなる。

この辺りはくねくねとカーブが続く細道だ。

突然、それまでずっと続いていた民家がふっとなくなった。

かわりに笹のような木が灰色の塀の上から突き出ている。

そしてその塀のある道が、やはりカーブになりながらずーっと続いていくのが、ヘッドライトの向こうにぼんやり見える。

それまで賑やかだった二人が急に黙ってしまった。

「気持ち悪い道やね。なんか出そう」

私がそう言うと、K子ちゃんが、「この向こうは神社なんです」

「神社かあ。だから人気がないんだ」

「中学生のとき、部活動で遅くなったときなんかはこの道が怖くて、思い切り走ってました」

わかる気がする。

こんな陰気な道、まして夜にはできるなら通りたくない。

そしてその夜は、無事皆送り届けてもらったのだった。

後日。

何となく私とK子ちゃんの話題は幽霊の話になった。

実はK子ちゃんは、結構霊感が強いらしい。

死んだおばあちゃんが台所に出てきてお茶を入れてくれと言うので、「何か変だな」と思いながらもお茶を入れて、おばあちゃんの前に置いたという。

しかしその後で、おばあちゃんは死んだはずだということを思い出して怖くなって家から飛び出した。

K子ちゃんが戻ってきたとき、母親がテーブルの上のお茶を指差して、「これ何？」と聞いたそうだ。

「それでね、先輩、こないだ車で通った神社の道、あの道で私、怖い体験したんです」

私は、あのとき黙ってしまったK子ちゃんを思い出した。

「どんな怖い目にあったん？」

「中学生のときです。

やっぱり部活動で遅くなって、あの道にさしかかったとき、カーブになった先のところに女の人が出て、こっちへ歩いてくるんです。

白っぽい服を着ていて、髪の毛がすごい長くて、

ゆっくり歩いているけどぜんぜん生気がないんです。

もし、この世に幽霊がいたらあんなだろうなーと思いながら通り過ぎようとしたんです」

私は想像した。なるほど、怖いだろうな。
なにしろ、あの道だ。

「それで……よせばいいのに、私、その女の人の横を通り過ぎるとき、

振り返っちゃったんです。

そしたらその女の人の顔……、

顔は正面なのに

両方の目の玉だけをぎゅーっとこっちに向けて私を見てたんです。

——こんなふうに」

そうして彼女は両目の瞳を思いっきり左に寄せて私を見た。

その女性は、果たしてこの世のものだったのだろうか……？

第七話 すれ違う女（後書き）

全七話という予定でしたが、最後に締めの一話を入れます。
ご購入、ありがとうございます。

最終話 幽霊

今までのお話は、【恐怖のBGMつき】でご覧になれます。（表紙のバナーから飛んでください）

お付き合いましたきまして、ありがとうございました。

では最後に締めの一話を、どうぞ。怖くなくって、恐縮です。

+++++

幽霊寺の幽霊掛け軸の迫力は大したものだったと、某テレビ番組の収録で東京へ行き、目の前で見てきた先輩占い師さんが言っていた。

人の怨念や情念が、絵や物にこもるということは十分にあり得ることだと思う。

私にはそれらを、いや霊魂そのものを否定する人たちが信じられない。

目に見えないという理由で否定するのであれば、私たちは遺伝子や神経、その他もろもろの人体組織を直接見ることはできない。

それを把握できるのは、医者など特殊な知識と道具を持った人たちだけである。

心霊においても、霊能力というメスを持った人たちだけが、霊に直に接することができるのだ。

あの人たちは、メスを持ってないからといって医学を否定するのだろうか？

骨がレントゲンで写るように、霊も写真に写る。

私には能力の無い人たちのひがみとしか思えない。

また、心霊学自体、怪しい学問である。
だがそれでいえば、例の「発掘ねつ造事件」。
F氏が「出た」といえばそれが歴史の偉大なる発見になっていたのだ。

考古学もいい加減、怪しい学問ということになる。
だがそういうひとりの詐欺師のために、本当に学問を修めている
多くの立派な方たちを否定していいものだろうか。

霊魂は実在する。

今、生きているあなたの中に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1491c/>

怖い話…

2010年10月9日04時27分発行